

物語が導くものと物語がもたらすもの

——「除夜の雪」「ぼくが探偵だった夏」「蟹工船」を手掛かりに考える——

平井修成

ここに取り上げるのは、全く傾向の異なる三つの作品である。一は、永滝五郎によって作られた新作落語「除夜の雪」。桂米朝師の名高座の録音が残っている。二は、内田康夫の「ぼくが探偵だった夏」。所謂、浅見光彦シリーズの一冊。そして三は、余りにも有名な小林多喜二の「蟹工船」。

落語と、娯楽性の強いミステリーと、プロレタリア文学と。三作品は、ジャンルが異なっているばかりでなく、その内容も大きく相違している。「除夜の雪」は、自殺した女性の幽霊が、生前よく参詣に来ていた寺に現れるという、怪談である。「ぼくが探偵だった夏」は、軽井沢の別荘で家族と一夏を過ごす小学五年生の浅見光彦が、そこで起こった難事件を解決するミステリー。そして、「蟹工船」は、過酷な労働に耐えかねた蟹工船・博光丸の労働者たちが、弾圧に抗して立ち上がる様子を描いたプロレタリア文学である。

しかし、ジャンルや内容がどれほどかけ離れたものであろうとも、これらの作品が持つ「読者（落語の場合は聴き手）を惹き付ける力」には、ある共通のものが存在すると想像される。そして、その共通性こそ、物語を芸術たらしめている要素なのである。

一 作品の魅力について

最初に、これら三作品の、各々の魅力について考える。この考察は、余りにも主観的で恣意的なものに思われるかも知れない（魅力

などという言葉自体が曖昧だ）。しかし、考察は、実は客観性を持っている。そのことは、後に述べよう。まずは、作品の分析を通じて、魅力的と思われる要素を抽出することとする。

一 一 「除夜の雪」

雪の積もった大晦日の夜、大阪の街中にある寺。庫裏に、兄弟子の大念、弟弟子の悦念、珍念の三人の小僧さんが集まって、除夜の鐘を撞く時刻を待っている。この寺に十一年も修行を続けている大念は、一月に來た悦念、来てまだ三月の珍念に、雪の夜に鐘を撞く苦勞を話して聞かせる。苦勞話は、やがて住職の吝嗇に対する愚痴となり、珍念が持ち出して來た、小僧には使うことが許されていない堅炭を火鉢に焼べ、玉露を飲み、鯛の丸干しまで食べて、延々と続く。

そこへ「伏見屋の御寮人さん」が訪ねてくる。「ずっと以前にお借りしとおりました提灯をお返しにありがとうございました」（注1）というのである。

「伏見屋の御寮人さん」が帰った後、大念は、二人の弟弟子に、彼女がとても気の毒な身の上であることを語る。若旦那に望まれて、大店の伏見屋に嫁入った彼女は、貧しい家の出身であった。その為、結婚に反対であった姑から、毎日々々ひどい虐めを受けているというのである。

その話をしている最中、本堂で鐘が一つ鳴る。

「誰も居らん本堂の鐘が鳴ったり、木魚が鳴ったりする時には、檀家に死人ができた時や。びっくりせえでもええ。古い寺にはそんなことはきょうさんあるのや。」

と、大念は言う。

次いで、積もった雪のどこにも御寮人さんの足跡がないことに気が付き、三人が気味悪がっているところへ、伏見屋から使いの者（藤助）が来て、御寮人さんが自殺したことを告げる。

使いは、顔馴染みの大念に、姑の嫁いびりの凄まじさ、御寮人さんにとってはこの寺に参詣することだけが息抜きであったことを語る。「お別れに来やはったんやなあ。」と言うのである。

ここには、嫁と姑の関係、出身の家の格差といった、人々にとつて馴染み深い社会的な話題が存在している。あるいは、教訓的な物語として、これを捉えることが出来るかもしれない。噺の末尾にあるような、「釣り合わぬは不縁の因」という処世術を教えるものとすることも出来れば、格差に拘る固陋への抗議を読み取ることも出来るであろう。

しかし、「除夜の雪」が何度聴いても飽きないのは、この悲しい物語の背後に流れる冬の夜の寺の風情であるように思われる。

風情は、小さなエピソードの積み重ねによって形成されている。例えば、夜の寒さを語る次のような台詞。

……いっそ雪でも降っててくれたほうがええねや。この、宵にやんで、ピシッと積もってるといいうやつが一番かなわんねん。夜中に、ゲーと風でも吹いたら冷え込み方というのほもうこたえられんで。……

鯛の丸干しを食べる場面では、

……ウワァ、これ、あかんあかん。そんなもん火の中へ……そんなことしたら、バーと臭いがこのへんに一杯になるがな。この大晦日てなものな、夜更けてからでも人がよう入ってきたりするもんや。ガラッと開けて、プーンと魚を焼く臭いでもしててみい。何を言われるやわからんがな。あの……お布施を包んだ紙があるやろ。それをちよっと五、六枚持つといで。寺の魚の焼き方というやつを教えたるさかいな。……

噺の最後は、御寮人さんの自殺を告げにきた藤助が、嫁いびりの話を一頻り語った後、大念に暇乞いをする場面である。

藤助「……えらい長居をしました。……ああ、除夜の鐘が鳴りだしましたなあ」

大念「珍念と、悦念が最前、鐘撞堂のほうへ行つたさかい、打ち出したん」

藤助「さよか。ここに提灯。あっちに釣鐘。……釣り合わぬは不縁の因だんな」

冬の夜の寒さ、寺で魚肉を食べることへの遠慮、鳴り始める除夜の鐘。それらが、会話を通じてきわめて丁寧に描写され、大晦日の寺の夜の雰囲気、聴き手に活き活きと感ぜさせるものになっている。

噺は、優れた俳句のような季節感を湛えていると言つてよい。それにしても、大晦日の夜のこうした描写と、先述した社会的話題と、聴き手の心に訴えかけるに何れが主で何れが従なのであろうか。あるいは、そのような問いかけ自体が無意味なものなのであろうか。疑問は、しばらく伏せて、次の作品を眺めることにする。

一―2 「ぼくが探偵だった夏」

内田康夫は、名探偵浅見光彦が難事件を解決するミステリーを、数多く生み出してきた。それらの中で、「ぼくが探偵だった夏」は、少し特異な位置にある。ここでは、浅見光彦の少年時代＝小学五年生の夏休みが描かれるのだ。

「名探偵浅見光彦の少年時代を書きたいと、ずっと以前から思っていたのが、ようやく成就した作品がこれです。」と、「あとがきぼくが少年だった頃」(注2)にある。

物語は、次のようなものである。

夏休み。光彦少年の一家は、軽井沢の浅見家の別荘に出掛ける。光彦は、現地の自転車店の息子・峰男と友達である。この二人に、光彦のクラスメイトで、軽井沢にある父の実家――喫茶店を経営している――に來ている少女・本島衣理も加わり、美しい避暑地を舞台に、少年少女の〈冒険〉が繰り広げられる。

この〈冒険〉の中で、浅見光彦の、後に「名探偵」となる資質が示される。鋭い観察力と推理力で、警察の捜査の盲点を補い、難事件の解決に決定的な役割を果たす。ミステリーとしての面白さは、ここにあるだろう。

しかし、これだけが作品の魅力ではない。あるいは、作品を支える最も大きな力は、作品全体に通奏低音の様に流れる「軽井沢の夏」かも知れないのだ。

突き抜けるように高く、青い空。カラマツ林の中で鳴きかわすカッコウ。キジや、ウサギや、時にはキツネまでが庭先を横切ってゆく。軽井沢には東京とはちがう空気と、驚くような奇跡の時間が流れている。

もちろん、素材が何であろうとも、これを読者に、ある方向性を

以て表象させる力がなければ、作品は読者をつつものとはならない。読者の記憶に予め用意された幻想によって、そして、主には表現的
努力によって、それは実現されて行く。

先の引用、また、次のような描写が、作中に鏤められている。

四日ぶりに、峰男くと森へ出かけた。まだ夏の盛りつつもりでいるけれど、森の様子がかすかに変化しているのを感じる。草や木の葉の色が、ほんの少し黄ばんで、秋の気配が忍び寄っているのだ。

地面の上に、カブトムシがひっくり返って死んでいるのを見ると、ああ、夏も終わってしまうのか――と寂しくなる。

「除夜の雪」と同じく、ここにも、因果的な連続によって組み立てられる物語と、〈風情〉とが共存している。

こうした共存は、実は、小説を代表とするストーリー性を持った作品一般に認められるものであって、例えば、『源氏物語』『桐壺』では、亡き桐壺の更衣への、帝の思いが、急に秋めく季節の移ろいと共に語られる。

野分たちて、にはかに膚寒き夕暮の程、つねよりも、おぼし出づること多くて、鞆負の命婦といふをつかはす。夕月夜のをかしき程に、いだしたてさせたまひて、やがてながめおはします。

また、ジョン・アーヴィン監督の「湖畔のひと月」(注3)は、ミス・ベントリー、ウィルショール少佐、ミス・ポーモントの三角関係を中心にした恋愛映画であるが、イタリアの高級リゾート地、コモ湖を舞台にしていることが、作品を印象深いものにしてている。

ちなみに、「湖畔のひと月」には、物語の中でさほど重要なエピソードではないが、ムッソリーニのファシスト党の活動する場面が、挿入されている。それは、快適なりゾート地の日々が、やがて終わる

ことを予感させるものであり、それ故に、日々は切ないまでに美しく印象されるのである。

「ぼくが探偵だった夏」にも、同様の仕掛けはあって、ここでは、少年達に、ほんの少し現代の格差社会の影が差している。光彦と峰男は、早朝に、カプトムシやクワガタを捕りに森へ入り、朝食の前に引き上げる。光彦は峰男に、別荘に寄って一緒に朝食を食べて行くように誘うが、

彼は絶対に「うん」とは言わない。「うちに帰って食べる」と言うのだが、たぶん、家の人に禁止されているにちがいない。そんな風に、町の人と別荘の人間との間に、目に見えない垣根があることを、ぼくもうすうす感じていた。

「湖畔のひと月」で、迫り来る戦争の影が、リゾート地の日々をより美しく見せるのに与って力があるように、やがて否応なく思い知らされるはずの大人の現実が、軽井沢の夏を、眩しいほど美しいものにしていくのだ。

しかし、だからと言って、ミステリー特有のトリックの解明よりも、こちらが作品の主題だなどと言うのは、早計である。判断は、まだしばらく留保しておこう。

一―3 「蟹工船」

次に扱うものは、プロレタリア文学作品、小林多喜二の「蟹工船」である。「ぼくが探偵だった夏」が、大臣とゴルフをするような父、同じくエリートの子を持つ、アップパーミドルクラスの少年を主人公としているのに対し、ここでの主人公は、劣悪な環境に呻吟する労働者の群れである。

オホーツク海で作業する蟹工船は、「工船」（工場船）であって、

「航船」ではない。だから航海法は適用されなかった。また、蟹工船には「勿体ない程の保険がつけてあるんだ。ボロ船だ、沈んだら、かえって得するんだ」。作品は、資本家たちに莫大な利益をもたらすこのような事業の仕組みを伝えながら、労働者たちへの過酷極まりない取扱いを描いて行く。こうした状況に怒った労働者たちはストライキを起すが、駆けつけて来た海軍の駆逐艦によって鎮圧されてしまう。しかし、労働者たちは、再びストライキを目指して立ち上がる。

昭和四年に発表された、このプロレタリア文学の古典が、現代に於いて脚光を浴びるきっかけとなったのは、平成二十一年一月九日、毎日新聞の東京版・朝刊に掲載された高橋源一郎・雨宮処凛の対談だと言われている。

「格差社会…08年の希望を問う」と題されたそれは、

雨宮 昭和初期の作品ですが、たまたま昨日、『蟹工船（かこうせん）』を読んで、今のフリーターと状況が似ていると思いました。

高橋 偶然ですが、僕が教えている大学のゼミでも最近読みました。そして意外なことに、学生の感想は「よく分かる」だった。僕は以前、「昔はプロレタリアというものがいたんだ」と、この小説を歴史として読んだけど、今の子は「これ、自分と同じだよ」となるんですね。

と言った発言を含む。

そして、九月のリーマンショック、年末の日比谷公園での年越し派遣村開設に象徴される、長期不況と非正規労働者の増加という社会状況を背景に、「蟹工船」は一種のブームとなる。

小説が、それが内包する思想によって読者を揺り動かす、典型例

の様に見える。しかし、「蟹工船」の伝える思想そのものは、かなり単純である。それは、一枚のアジビラに要約することさえ、出来るように思われる。

「蟹工船」が読者を圧倒するのは、その精緻な描写である。

寝る前に、漁夫達は垢でスルメのようにガバガバになったメリヤスやネルのシャツを脱いで、ストーヴの上に広げた。囲んでいるもの達が、炬燵のように各々その端をもって、熱くしてからバタバタとほろった。ストーヴの上に虱や南京虫が落ちると、プツン、プツンと、音をたてて、人が焼ける時のような生臭い臭いがした。熱くなると、居たまらなくなった虱が、シャツの縫目から、細かい沢山の足を夢中に動かして、出て来る。つまみ上げると、皮膚の脂肪っばいコロツとした身体の感触がゾツときた。かまきり虫のような、無気味な頭が、それと分る程肥えているのもいた。

文章によって何かが描写される場合、その表象の立ち上げは、二つのものに依存している。一は、文章そのものである。二は、文章をトリガーとして呼び出される、読者の心中のイメージである。

山口素堂の句「目には青葉 山ほととぎす 初がつを」は、後者の依存に賭けた優れた表現であろう。

ところで、一のケース、文章そのものへの依存が強くなれば、作品は読みづらいものとなる恐れがある。提供されるイメージが、読者が予め持っているそれと齟齬を生じる可能性があるからだ。あるいは、こうも言えるであろう。描写が精密になればなる程、描写は、読者のイメージ形成を拘束しようとする。読むという行為は、この拘束に心を委ねる行為であるが故に、読者は、何一つ読み落とすまいとして、その緊張が、伸びやかな想像力の発現を妨げてしまうの

だと。つまり、描写の精密さと、読み易さとは、反比例の関係にあるのだ。

この矛盾を乗り越えて初めて、作品は、作品固有の世界へ読者を誘うことが出来る。読者を圧倒する精緻な描写とは、だから一種のアクロバットであり、たぐい稀れな集中力でこのアクロバットをやっているける芸人を、我々は大文章家と呼ぶのである。小林多喜二は、間違いなくそのような一人である（誤解を恐れずに言えば、彼の社会的な使命感が、彼の文章家としての力を削いでいる面はある）。

「蟹工船」は、こうした精緻な描写に満ちている。こうした描写を積み上げて、「蟹工船」の世界は形成されて行く。

もう一つ例をあげよう。

波は風呂敷でもつまみ上げたように、無数に三角形に騒ぎ立った。風が急にマストを鳴らして吹いて行った。荷物にかけてあるズツクの覆いの裾がバタバタとデッキをたたいた。

「兎が飛ぶどオ兎がー」誰か大声で叫んで、右舷のデッキを走って行った。その声が強い風にすぐちぎり取られて、意味のない叫び声のように聞こえた。

もう海一面、三角波の頂きが白いしぶきを飛ばして、無数の兎があたかも大平原を飛び上っているようだった。それがカムサツカの「突風」の前ブレだった。にわか到底潮の流れが早くなってくる。船が横に身体をずらし始めた。今まで右舷に見えていたカムサツカが、分らないうちに左舷になっていた。

これを例えば、メルヴィル「白鯨」の、

大檣帆に加わっていたすさまじい緊張のため下隅索がほどけたので、巨大な帆桁が後甲板いっぱい大きく左右にぶらぶら

と揺れだしたのだ。この帆船に掃き飛ばされて、クイークエグに手荒くあしらわれた例の男が海に落ちた。一同、これには色を失ったが、さりとて帆船を捉えて止めるなどとても狂気の沙汰である。帆船はほとんど一秒ごとに前後左右にはねかえって、そのたびごとに次の瞬間には割れ砕けるかと思われた。(注4)

といった描写と比べてみるがいい。「蟹工船」の大きな魅力が那邊にあるかは明らかであろう。

人々を「蟹工船」の読書に赴かせた理由は、現下の社会情勢にあった。「蟹工船」を読み終えた後に、多くの人々が見出すのは、直面する現実と描かれた世界との同一性、さらには、描かれた世界が示唆する、現実改変への知恵であるのかも知れない。

しかし、人間は必ずしも、自らを動かすものを正確に知っているわけではないのだ(注5)。もちろん、だからと言って、「あなたを動かしているもの」を恣意的に決め付けることは出来ないのだが。

二 魅力の所在——所有し得ないものとしての「体験」

「除夜の雪」「ぼくが探偵だった夏」「蟹工船」の魅力を考えてきた。三作品は、それぞれ独自の〈思想〉——トリックの解明も思想には違いない——を含んでいる。しかし、魅力という点に関して言えば、その部分は二の次になると述べた。

この独断的にさえ見える命題の証明こそが、ここでの課題である。

「除夜の雪」の口演者でもある桂米朝師は、マクラに次のような話を降ろすことがある。

もうこのごろ、たいがいのはなしはみなさんがた、ようご存じ

で「エーまたあれかア」てなもんで。なかには寄席や落語会なんかへお越しになりましたも運の悪い方はそればかりにぶつかったりしまして、「あの嘶におれ取りつかれてるのやないやろか」なんて……(注6)

また、歌舞伎の世界には、「またかの関」という洒落がある。『勧進帳』の上演回数が多いことを、その舞台となった地名(安宅の関)にかけて皮肉ったものである。

何れも、同じ作品を何度も観たり聴いたりさせられる観客の迷惑を語ったものであるが、逆から見れば、何度も同じ作品を見聞きすることが一般的であったという芸能の事情を示している。

だから、ある演目が何度でも歓迎されることを意味する「芝居の独參湯」という譬喩も存在するのだ。独參湯とは、気付け薬の名称。不入りが続いた時にも、この演目を出せば必ず観客を集められるとして、『仮名手本忠臣蔵』のことを指す。人気の気付け薬なのである。

もちろん、演劇の場合、同じ演目でも、公演毎に全く同じものが造られる筈はない。演出の違いもあるうし、例えば、『伽羅先代萩』の政岡の演技が、六代目中村歌右衛門から坂東玉三郎に継承されたとして、大和屋が成駒屋のカーボン・コピーであることは誰も望んでいないし、そもそも不可能である。

落語の場合も同様で、同じ「やかん」でも、桂文治の語ったものと立川談志のそれとは、決定的に違う。

加えて、同じ役者や咄家が、一つの興行期間中に演じ語る場合も、その日によって出来不出来、多少の変化はある。だから、同じ作品を見聞きすることは本質的に有り得ないのだと、そのように考える事は間違ではない。

しかし、観客、聴衆の気持ちは、少し違っている。彼等は、同じ

ものをもう一度見聞きたい場合があるのだ。平成三年、新装開場した京都南座。鴈治郎を襲名したばかりの現坂田藤十郎が藤屋伊左衛門を演じた『廓文章』。その明るく華やかな舞台が忘れられなくて、ただそれだけの理由で、二十数年後に、藤十郎の伊左衛門を見に東京の歌舞伎座まで出掛けて行く人間は、確かにいるのである。

小説の場合は、事情は、より単純になる。文字に定着されたものは、変化しようがないからだ。尤も、改訂版が出る可能性はある。しかし、改訂版を買ったり借りたりせずに、自分の蔵書を読み返すことは可能である。そのように、何度も読み返される本のことを、愛読書という。

人はなぜ〈読み返す〉のだろうか。読み返せば、新しい発見が生まれることもあるかもしれないが、それは結果論であって、人を再読に赴かせる理由は、もう一度あの舞台を見たいという場合と同じく、それに触れている時の、あの素晴らしい体験を、再体験したいからではないだろうか。

だが、なぜ一度体験したものを、よく知っているものを、二度三度……と体験したくなるのか。

実は、我々が所有出来るのは、体験の記憶だけであって、体験そのものではないからなのだ。例えば、怪我をしたことを思い出しても痛みは伴わないし、宝くじに当たったことを思い出しても大金が手に入るわけではない。だから我々は、心地よい、あるいは魅力的な体験の記憶をトリガーに、その再体験に赴くのである。もちろん、体験の記憶の種類によっては、再体験を忌避したくなるものもある。手酷い失恋の記憶がトラウマとなっていて、新しい恋に踏み出す勇気を失ってしまうなどは、よく聞く処である。

一方、体験に基づかない記憶もまた存在する。抽象的なものや概

念的なものがそれで、電話番号や住所、数学や物理学の定理が、典型であろう。覚えていて調べる必要がなければ、誰も電話帳を再度開こうなどとは考えないのである。

つまり、この種の記憶は、それが意識に上ったとしても、何であれ再体験や再体験の忌避を促す力は持たないのだ。

「除夜の雪」は、何度聴いても飽きない曲である。だからこそ、オーディオ・テープやCDといった、何度でも再生可能なメディアが発売されているのだ(注7)。読者層はすいぶん異なるかも知れないが、「ぼくが探偵だった夏」も「蟹工船」も、それを愛読書とする多くの人々がいるはずである。

そして、これ等三作品は、それぞれ独自の〈思想〉を含んでいる。釣り合わない家同士の結婚は不幸を招くとか、隠されたトリックが何であるとか、労働者階級は団結して資本家を打ち倒すべきであるとか。これ等は概念であり、如上の考察を踏まえれば、再体験を促す力を持たないものである。電話番号と同じで、知っていれば、〈知る過程〉を繰り返す意味の無いものなのだ。

すると、「除夜の雪」を何度でも聴き直させ、「ぼくが探偵だった夏」や「蟹工船」を再読、三読させる力は、大晦日の夜の寺の描写(「除夜の雪」、軽井沢の夏の自然や避暑の様子描写(「ぼくが探偵だった夏」、荒れ狂う北の海と、そこを行く船に生きる人々の描写(「蟹工船」)にこそ求められ得るということになる。

本稿の冒頭に、ジャンルや内容がどれほどかけ離れたものであるうとも、作品の持つ「読者を惹き付ける力」には、共通のものが存在するとの推測を述べた。これまで〈風情〉といった表現を使ってきたが、それは厳密に言えば、〈読書を通じて、「経験の記憶」として記憶される作品の要素〉なのである。これこそが、物語を芸術た

らしめているものに他ならないのだが、それにしても残る疑問があるだろう。物語はなぜ〈思想〉を伴うのか、という疑問である。

三 物語に置かれた〈思想〉の役割

「蟹工船」が、なぜ注目されたのかを思い出そう。先に引用した対談は、『蟹工船』を読んで、今のフリーターと状況が似ていると思いました。「僕は以前、「昔はプロレタリアというものがいたんだ」と、この小説を歴史として読んだけれど、今の子は「これ、自分と同じだよ」となるんですね。」といった部分を含むが、対談全てを通してみても、「蟹工船」の表現力を評価した部分は存在しない。

また、戦前、「蟹工船」は何度も出版され、その度に発禁処分を受けている(注8)が、こうした処分の主な理由は「安寧秩序紊乱」であり、(当たり前だが)文章の巧拙そのものが処分の対象となることはなかった。

つまり人間は、評論家であろうと権力者であろうと、もちろん一般大衆であろうと、書かれた(語られた)ものが内包する思想に、先ず意識が向く傾向があるのだ。

講談社文庫版「ぼくが探偵だった夏」の山前譲による解説文には、「ここではとりわけ、光彦少年が体験する蛭井沢の自然が印象的だ。」とあるが、この文の直前には、「その(光彦の―筆者注)感性はなにも犯罪にだけ反応するわけではない。」の一文があり、謎解きの面白さが、こうした作品の最初の留意点であることを認めた上での発言に他ならない。

「除夜の雪」は、先にも引用したように、「ここに提灯。あっちに釣鐘。……釣り合わせは不縁の因だんな」とサゲる。落語のサゲ方には様々なパターンがあり(注9)、サゲの内容が咄の主題だとも

咄の注目点だとも言うことは出来ないが、〈姑の嫁いびり〉とか〈格差婚〉とか、人々に馴染み深い話題だからこそ、サゲに利用し易かったのは確かであろう。

こうした意識の動きは、先述したように、人間には普遍的なものであると言ってよく、例えば辞書の項目解説は、この普遍性に向かって記述されている。

【机】 飲食の器物をのせる台。書を読み、字を書くのに用いる台。

全文を引用したわけではないが、『広辞苑』(第六版)の「机」の項目解説である。ここからは、古い小学校の校舎に並ぶ木製の小さな勉強机の醸し出す懐かしさ、作家の書齋に置かれた大きな机の放つ厳しくも心地よい雰囲気、といったものは立ち上がってこない。

また、次は、「旺文社国語辞典改訂新版」(昭和六十二年刊)の「猫」の項目解説である。

【猫】 愛玩用・ねずみ駆除用の家畜として飼われる、ネコ科の哺乳動物。

猫という動物が、猫を飼う人々、猫カフェを訪れる人々の心に喚び起こす、あの魅力的なイメージを、ここから想像することは不可能であろう。

もう一つ例を挙げよう。「明治は遠くなりけり」という成句は、よく知られている(注10)。平成となって久しい現代では、使われる頻度は減少傾向にあるようだが、若者の行動を批判的に捉える時、失われた街並みを懐かしむ時などに、しばしば使われてきた。しかし、この成句が、中村草田男の俳句「降る雪や明治は遠くなりけり」に由来することを知る人は多くない。

なぜだろうか。

「明治は遠くなりけり」は、一つの思想である。時代は移ろうものであるという認識を、それは伝える。「なりにけり」の「けり」は詠歎の助動詞で、この一節が認識だけを伝えているというわけではないが、詠歎は容易に読者に共有され得る性質のものであり、ならば人々は、詠嘆する（固有の）主体に留意する以上に、提出された思想そのものへの共鳴に捕らわれるはずなのだ。

しかし、この一節の上に「降る雪や」が付けば、様相は一変する。句から立ち上がるのは、抽象的な思想ではなく、時の移ろいに感慨を禁じ得ないで立ち竦む一人の人物の姿である。この句は、自分の出た青南小学校を、大学生となって訪れた感慨を詠んだものとされているが、こうした作家論的事実を知らなくても、この句によって表象されるものは抽象化の不可能な〈風情〉なのである。

そして、「明治は遠くなりけり」の部分だけが、人口に膾炙したのだ。

小説や落語の要約、辞書の項目記述のされ方、そして中村草田男の俳句の記憶、これ等のあり方が示唆するものは、人間の世界了解が如何に抽象化の操作を日常としているかという点である。そのような了解作業を通して、我々は納得し安堵する。そうでなくてどうして、現に二人の人間が出会っているのに、名刺を交換する必要があるだろうか。

結

物語はなぜ〈思想〉を伴うのか、という問いに、今は答えることが可能である。それは、物語が、読者の日常性に向かって開いた導入部なのだ。もちろん、導入部といったところで、物語の冒頭に置かれていない必要はない。くっきりとした〈思想〉——嫁姑問題であ

ろうと犯罪の解明であろうとプロレタリア革命の必要性であろうと——が見出されることで、読者（聴き手）は、物語全体を、自分たちが生きているこの世界と同様なものと感ずることが出来るのである。

しかし、既に述べたように、物語の魅力はそこにはない。読者が物語を愛してやまないのは、決して自らの内に止まることのない、あの読書という経験故である。読者は、馴染み深い世界了解の形式に導かれて、物語の中に進み入る。そして、書かれている具体的な内容とは関わりなく、根源的に新たなものである世界を生きることになるのである。

【注】

1. 「米朝落語全集」第五巻 昭和五十六年十一月「除夜の雪」以下、「除夜の雪」の引用は、全て同書による。
2. 「ぼくが探偵だった夏」は、平成二十一年七月、講談社ミステリーランドの第十六回配本として刊行された。ここにテキストとしたのは、「あとがき ぼくが少年だった頃」を含む、平成二十五年七月刊行の講談社文庫版である。
3. イギリス映画。一九九〇年作品。
4. 田中西二郎訳「白鯨」上巻 昭和五十二年十月 二十四刷改版新潮文庫。
5. 「長い間精神とは、意識と同じものだ」と信じられていた。〈無意識の精神〉などというところは〈丸い四角〉というようなものだと考えられていた。／ところが、前世紀の終りごろから、意識してない精神運動の存在を認めなくてはならぬ事実が、つきつきに明らかになってきた。（宮城音弥「精神分析入門」昭和三十四年

- 5月 岩波新書「I 精神分析とは何か」。
6. 前出「米朝落語全集」第四巻『口合小町』
7. 「桂米朝上方落語大全集(第四十三集)」東芝EMI ZF20
—234 等。
8. 「蟹工船」の初出は、『戦旗』昭和四年五・六月号。六月号は発禁処分。単行本としては、同年、九月、十一月と出版されるが、何れも発禁処分。翌年三月に発禁の該当箇所を削除した『蟹工船』普及改訂版が発行される。参考「溪流No.11『蟹工船』初版は何部出版されたのか」http://f.mirai.at.webry.info/200805/article_44.html
9. 今村信雄「落語事典」昭和三十二年九月 青蛙房 は、「落の解説」で、「考え落」から「途端落」まで、十二種に分類している。
10. 「昭和40年代、「明治は遠くなりけり」という言葉がはやっただことがある。大正が過ぎ、昭和の時代となり、明治100年にあたるころに至る所で使われた」(「八重山毎日新聞」平成二十年五月十五日「不連続線」)。